令和７年度　日本大学スポーツ科学部　個人研究費　研究実績報告書

所属： スポーツ科学部　競技スポーツ学科
資格： 准教授
氏名： 松尾　絵梨子

研究課題名	大学生アスリートに対するコンディショニングサポートおよび大学生における健康の維持・増進に関する研究
研究目的及び研究概要	研究目的 本研究では、生活習慣（運動・栄養・睡眠など）やアンチ・ドーピングも含めたコンディションに関する意識、健康に対する意識、愁訴、心理的状況などのアンケート調査の実施と、コンディション調整および健康支援に関連した測定や実験の実施を行い、本研究課題を明らかにすることを目的とした。特に今年度は、ドーピング陽性率の高いボディビル競技を対象にドーピングに関する知識や意識、倫理観について調査し、現状把握と課題の抽出、そして今後の健康支援策について考察した。 研究概要 今年度は、大学生ボディビル競技者88名を対象に、ドーピングに対する知識や意識、倫理観、さらに情報収集の方法に関する現状について明らかにするために、Web形式(Google Forms)のアンケート調査を行った。
研究実績の概要 研究の進捗状況・得られた成果・今後の課題・研究実績等	・ボディビル競技では筋肉量や肉体美が重視され、海外ではアナボリックステロイドなどの筋肉増強作用のある禁止薬物の使用が深刻な問題となっている。日本では一部のボディビル大会でのみドーピング検査が実施されているが、統一された基準がなく教育体制も不十分である。アナボリックステロイドなどの禁止薬物は深刻な健康被害や命の危険を伴う恐れがあるため、健康リスクへの理解や選手自身の倫理観が重要であり、その実態把握は今後のアンチ・ドーピング教育や対策に不可欠である。本研究では、大学生ボディビル競技者を対象にドーピングに対する知識や意識、倫理観、さらに情報収集の方法に関する現状について明らかにすることを目的とした。ボディビル関連の大会出場経験者、ボディビル関連の大会出場を目指す大学生または大学院生100名のうち、回答を得られた88名を解析対象（20.3±1.3歳）として、Web形式(Google Forms)のアンケート調査を実施した。その結果、本研究対象者においては、アンチ・ドーピングへの意識や倫理観の高さ、将来への悪影響に対する理解は浸透していることが示された。一方で、他者のドーピング行為に対する評価や態度には統一性がなく、明確なアンチ・ドーピングの意識が共有されているとは言い難い。これは、ドーピング行為を一律には悪と捉えにくいボディビル競技の特性が影響している可能性がある。また、ドーピングに関する情報収集には手軽で即時性の高い媒体を重視していたが、情報の信頼性が欠如している可能性のある媒体も支持されていた。以上のことから、今後は競技文化や大会環境に加え、情報環境も考慮した継続的かつ予防的なアンチ・ドーピング教育の実施が必要である。 なお、本研究の成果は日本薬学会第146年会にて発表した。 以上の成果から、今後は、スポーツファーマシストや薬学部と連携し、競技に特化したアンチ・ドーピング教育支援策を検討していきたい。また、今年度は対象者が88名にとどまったが、さらに多くの対象者を募り、より詳細な検討をしていきたいと考える。